

山梨県と神奈川県のちょうど県境に位置する某町での、ある健全な青少年の体験談である。

「なにやら中国大陸にしか生息しないはずのホソオチヨウが最近あの辺りに発生しているらしい」という噂に蝶屋魂を揺さぶられた青年は、この某町のバス停に降り立った。「ふむふむ、こんな所にいるのかあ」と、のどかな里山の風景を眺め、どこかの愚か者が日本に持ち込んだであろうホソオチヨウを見つづけるべく足を踏み出した。

小学校の校門近くに何やら白いペンキ塗りの看板が立っている。「なににな、ここは天然記念物キマダリルツバメ(珍蝶)の生息地? 無断で採集したら条例で罰せられる?」。大きなネットを片手に看板を熟読している姿は、地元の人々にどう映ったのだろうか。「うわあ、これじゃどう見ても自分の手配書をのぞいている指名手配犯だなあ」。そう思った瞬間、すでにネットは小さくなってザックの中に避難していた。

サロシ

民報

しかし、もう手遅れであった。小学生たちが鋭い視線を投げつけている。それらを背中に感じながら、そそくさと退散を決め込んだ。「俺はこの町の天然記念物を捕りに来たんじゃない、ホソオチヨウを捕りに来たんだ、後ろめたいことはない、もっと堂々としろ」と心に言い聞かせながら、あちこちに容赦なく立ち並ぶ

しかし、もう手遅れであった。小学生たちが鋭い視線を投げつけている。それらを背中に感じながら、そそくさと退散を決め込んだ。「俺はこの町の天然記念物を捕りに来たんじゃない、ホソオチヨウを捕りに来たんだ、後ろめたいことはない、もっと堂々としろ」と心に言い聞かせながら、あちこちに容赦なく立ち並ぶ

悪魔の看板



渡辺 浩

の悪魔の看板は、天然記念物の写真入りの立派な金看板に大変身し、ゴルフ場の案内板も急増していた。噂の天然記念物が発生しているはずの桜の古木を訪れて見ると、人間だけが過ぎやすそうなキレイな公園に姿を変えていた。「これがトドメかな」と、これで確実にすみかを無くした天然記念物を少し哀れんだ。

あの悪魔の看板の前を通り抜け、やっとの思いで林道に入りネットを広げた。が、何と、こんな林道の奥にまであの看板は…。しかも目の山肌がキレイに削られ、ゴルフ場の造成中である。こんな光景とあの看板を同時に見ようとは。どうせなら「周囲五十メートル以内」に隣接するべからず」という看板のほうが

数年が過ぎ、あの健全な青少年が勤勉なサラリーマンになったころ、三度あの某町を訪れてみた。もう驚きはなかった。あの里山の風景はどこにもなく、広大な工業団地と化していた。彼はこう思った。結局、この町は何を保護していたのか、本当の蝶の保護は環境保全なのに、蝶がいなくなっても条例は生きているのか。あの看板を見て育った子供たちは蝶を愛する大人たちを悪い人と思いつづけているのだろうか。あの看板は子供たちにどんな自然観を植え付けたのだろうか。大型トラックが行き交う道路脇には、夕日に光るあの「悪魔の看板」がポツンと立っていた。(石川町北町、会社員)